

---

# 美貌の王子と年上の女

桜木春緒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美貌の王子と年上の女

### 【Zコード】

Z94810

### 【作者名】

桜木春緒

### 【あらすじ】

架空西洋中世風恋愛小説。ロティオール王国の第一王子の亡き母親は、国王の愛妾で宫廷の伝説と化している美女。その母に酷似していると噂に高い美貌の王子ラシャと、彼より10歳年上の、常に恋人が三人居るという男爵家の末亡人ナセアとが…。

(携帯閲覧用のための投稿につき「春想亭暁向」掲載のものと内容は同じです)

「ねえ、助けて…」と蠱惑に満ちた美しい女は言った。

「助けて、とはどういうことですか？」

「…そうね、また今度話すことにするわ」

女は高貴な血筋を持つている。

いま彼女の頬の下に居る男よりはるかに。

2年前は良かつたと、ナセアは良く思う。

彼女の母親は、現王の庶腹の姉であった。先の王に見初められた彼女の祖母は、王の湯殿の世話をするような身分の低い端下女ではあつたが、庶民にしては美しかつたそうだ。

そしてまぎれもないロティオール王の胤を授かり、女児を産んだ。それを王も認めてくれた。

そうやつて生まれたナセアの母は、ロティオール国内の子爵家に嫁ぎ、4人の子供をもうけた。ナセアは三番目の娘で、美貌を謳われながら生い立つた。

十代の半ばの頃から、さまざまの男性の目を引き、いくつかの浮名は流したもので、十八歳で無事にジョイ・グローセン男爵の奥方に納まることができたのである。

夫のジョイは6歳上で、若く美しいナセアを可愛がつた。これほど愛らしい者を妻としたことを喜んだ。

つややかな褐色の髪に桜色の頬、秋の夕闇のような蒼の瞳。ふつくらした唇が少し尖つていて、どこか拗ねたように見えるが、そのためには微笑んだときの変化が鮮やかで、彼女の印象を彩り豊かにする。

彼女自身は、夫を愛したとも愛していないとも、そのときには良

くわからなかつた。

むしろ疎ましくさえ思つたかもしれない。

富中の様々な催しでも以前のように男性たちにもてはやされたることもなくなり、そういう輪の中に入ることも遠慮しなければならなくなつてゐた。結婚してから3ヶ月ほどの頃には、つまらないと思ひはじめてさえいた。

その後、子供も生まれなかつたが、それでもジェイはナセアをこよなく愛し、いろいろなわがままをも快く許していた。その少し男を振り回すような仕草を、むしろ愛すべき性情として彼は受け入れていたのだろう。

海を見たいといえば旅に付き合い、南国の真珠の髪飾りが富廷の娘たちの間で話題になれば、それを購つために産出国へわざわざ使いを出して最新の細工の物を手に入れたり、馬車が地味だと言えば改造し、湯殿が狭いといえば広く改築をした。

浪費が過ぎると、執事が言つてゐることも、ナセアには聞こえないように彼は心を碎いていた。

そんな風に、言いなりの夫を諭しんでいたナセアなのである。

ジョイ・グローセンは取り立てて美男ではなく、少し猫背氣味の中肉中背の、さして風采の上がつた男ではない。彼女と結婚するまでは、服装も地味で趣味もよくなかった。

いざ結婚すると決まつたときでさえ、その名前の男爵とはいつたい誰だつて、とナセアが疑問に思つたくらい印象も薄かつた。

そんな彼と、富中の催しや他家の宴席にも一緒に行かねばならぬことをナセアは不満ですらあつた。だから多少のわがまますても許されると思っていた。

なぜなら自分は結婚するまでは貴族の青年たちの憧れの的であつたのだから、その自分を娶る幸せを得たのだから。

とはいへ、そんな彼とナセアの結婚生活も2年を過ぎるとそれは

それで安定して、ナセア自身も「こんなものかな」と思うよくなつた。ジェイがナセアに対して穏やか過ぎることが物足りなくはあつたが、優しさのない男よりはずつと良いと思つよつにしていた。相変わらずナセアがいろいろなわがままをジェイに仕掛けては、彼が困り顔をしながら応えることが習慣になつていて。それも二人の独特の心の交流であると、時がたつてナセアは気づいてきたのだつた。そして、そうやってナセアに応えようと努力する彼にかわいらしさを見出し始めていた。

そんな安らいだ生活が破綻したのはナセアが二三歳、ジェイが二九歳のときであつた。

ジェイが隣国サンサとの戦に行かなければならなくなつたのだ。彼は以前にも一度出征している。貴族たちはそれが通過儀礼のよつに、義務として戦役を課されていたが、一度は義務を終えたジェイにも、長引く戦争のためにもう一度その役目が回つてしまつたのである。

「嫌だわ」

ナセアはジェイの胸に頬を乗せながらそう言つた。彼の胸は着衣の時に見るより、ずっと厚くたくましい。

「大丈夫。前に行つた時にも危ないこととはなかつた。今度も無事に帰つてくるよ」

彼はそつとナセアの頬を両手で挟み、これほど愛しい者が居るのにどうして無事に帰らないことがあるだろうか、と言つた。ジェイもそんな台詞めいた言い回しをするようになつたのか、とナセアは意外に思つた。

「サンサに行く前に、一緒に旅にでも行こつか?」

「美しい所が良いわ」

「南へ行こうか。レスフォの辺りの海は綺麗だと聞く

それはどこなの、とナセアは聞いた。

ロティオールの南端にある軍港の町の名前がレスフォといふこと

など、首都のキーに生まれ育ち、そこからほとんど出た事のない彼女は知らない。

レスフオには王太子リティスが先年より領主となつて赴任している。もともと次代の王になる人間が治める習慣の土地であったから、それは順当な人事で特に話題にもならぬことだつた。同時にレスフオの隣領の跡取りの絶えたソント公の名跡と領地を、庶腹の第一王子に王が与えたことも特に奇異なことではなかつた。

ナセアとジェイは、レスフオを訪れ、まず最初に現在一七歳の若い王太子に、当地に数日滞在する旨の挨拶をした。

レスフオと言う街が思いのほかに殷賑な都市であることをナセアは喜んだ。

軍港であると共に、海上流通の拠点であるために色々な国の様々な文物が集まつてあり、賑わいもたいへんなものである。

それでいて首都キーには堅苦しくなく、南方の温暖な空気のためか、絶え間なくならかに吹く海風のためか、開放的な雰囲気の街だつた。

その日はレスフオの領主館の一隅に宿り、翌日は、リティスの勧めにしたがつてレスフオの隣領のソントに行くことにしていく。

「弟はまだ一二歳で、作法などわきませんが、ご容赦ください」とまだ一七歳になつたばかりのリティス王太子は言つた。微笑まい事だとナセアはソントへ向かう馬車の中でジェイに話していた。

レスフオを朝に出発し、左手にずっと淡く青い海の光を見ながら半日、ソントの領主館に到着する。

前日のリティス王太子に対したように、ジェイもナセアも、領主であり現王の第二王子である一二歳のソント公ラシアヴィラムに丁重に挨拶をした。なるほど兄であるリティスがあらかじめ許しを求めたように、礼儀としてかけるべき言葉は彼からは出てこなかつた。少年領主は眉の辺りに憂いを帯びながら、ただ無愛想に黙つてう

なずいただけであり、挨拶を受けながらも居心地の悪そうな落ち着きのない態度を改めることもない。

そのいさか無礼な少年の顔を見て、それでも、怒りがわくこともなく、ナセアもジェイも一時は言葉を忘れるほどに魅入られた。

これが噂のラシャ王子か、と。

噂とは、彼の容貌に関してである。父親はいうまでもなく現ロティオール王のヴァルト・オーディアスで、既に亡き人になっている彼の母親は、現リコリス子爵の妹で名はファルミナという。

ファルミナは、未だに宮中の伝説と化している美貌の人であった。その母にラシャは酷似している、と彼を見た事のある人が言つ。ナセアも、ジェイもそう思つた。

ナセアがファルミナを見たのは幼い頃のことであったが、まるで絵の中から脱け出したような現実離れしたような美しさだと印象があつた。ジェイはもつと鮮明に覚えていて、ファルミナの切れ長の大きな眼の艶やかな光に、少年ながら憧れて止まなかつたという記憶が残つていた。

「綺麗な子ね。ずっと眼を奪われてしまつようです」

とナセアは感嘆しきりであつた。

そんな話をしながら二人が眺めのいい海辺を散歩している間に、遠くに見えた。

そのラシャが他の少年たちと共に無邪気に大きな声で笑いながら海に飛び込んでいく。それは、わんぱくなただの男の子そのものの姿であつた。

「私にもあんなふうだつた頃があるのだが、と言つて信じる？」

「うそ。ジェイはそれほど自分が綺麗だと思っていて？」

「そうじゃなくて……」

手をつけないで歩きながら、ナセアは、わかっています、と明るい声で

笑つた。

ジェイもナセアに手を引かれながら、笑い声を重ね、そんな楽し  
げな一人の声は海風に吹き飛ばされていった。

南への旅行から帰つてからほほひと月の後。  
ジェイが出征する日が来てしまつた。

旅からの帰路の頃から、ジェイの口数が少しづつ減り、時折悩ましい表情を見せるようになつてゐた。仕方のないことだが、ナセアにはそれも心配をかきたてられるようで不満であつた。

普通に一人で季節の話などしている間に、ジェイは不意にナセアを強く抱きしめたり、昼の日の高いうちから次の朝になるまで彼女を求め続けたり、そういう行動を取ることが多くなつてゐた。

無事で戻つてください、と時には口に出した。多くは心の中だけで、ジェイの厚い胸に抱きしめられながらナセアはそれを強く祈つた。

愛している、とジェイは答えた。結婚してからナセアが請い願つても照れくさがつてなかなか口にしなかつた言葉だった。

「ナセア、俺は女々しいだらうか？離れたくないんだ」

前夜からジェイの欲求に応え続けて朦朧としたナセアの耳に、夜明け近くに彼の泣く様な声が届いた。ナセアはただ首を横に振るだけしかできない。

国の命令で決まつてしまつたことを覆すことなどできるはずがない、ナセアもジェイもただ従うだけなのだ。

まもなくジェイは彼女の元を離れて、サンサという異国の戦場に赴かねばならない。そしてナセアはジェイを遠方に連れていかれ、少なくとも一年は一人残されてしまう。

「ご無事で、どうか…」

その先のナセアの声は、ジェイの唇に遮られて続けられなかつた。

それから三か月でナセアは末亡人となつた。

ジェイは、ナセアは知らなかつたことだが、実は乗馬と槍が特に巧みで男たちの間では知られた存在だつたそうだ。戦場ではそれを買われ総督の王弟ヴェアミン大公の親衛隊を任される身となつた。彼自身も、彼以外の他の者たちもそれは名誉のことだと最初の頃の手紙に書いてもいた。

しかしひと月ほど経つてからナセアの元に来たジェイの手紙によると、ヴェアミン大公とは自尊心やうぬぼれが強く、どこか自軍を過大評価する面があると分析していた。

戦場の駆け引きにおいても、武人の礼儀だの美学だのといった精神論を持ち出し、奇襲や斥候による情報収集を卑怯だといい、さらには新兵器なども邪道だと言つて採用など認めない。そのため、その総督の作戦には無理があり、一見勇ましいようでも、ただ正面をだらだら攻撃しているだけで犠牲が多く成功するところが少ない。そんなことも言つていた。

それで居ながら、ロティオールの国表には華麗な装飾を施した文章で樂観的な報告のみを送り、自らの力量を自ら喧伝することがはなはだしいために、国内では彼は名将軍だと思われている。とんだ勘違いだ、とジェイにしては珍しく、批判がましい愚痴めいたことを書き送つてきた。

それを読んだときには、ナセアは戦場のジェイに同情した。

ナセアもまた、ヴェアミンの自己満足な宣伝に基づく富中の噂で、一見戦線が膠着しているように見えるがかの大公が名将であるから、かるうじてサンサを食い止め得ているのだ、と首と回じよつに思つていたのである。

そして、ある日。

ヴェアミン大公の発案による総督自らの前線の督戦に同行したジェイは、その派手やかな行列を標的に奇襲してきた敵の遊撃部隊に

よつて殺された。

わが部下にふさわしく勇戦し壮烈な戦死であつたと、ヴュアミン

大公からの贊美と悔やみの手紙も届いている。

だがありようは。

ジョイと親しく、そのとき共に親衛隊の副官としてヴュアミンにしたがつていた彼の友人によると、3日くらい前に全軍に予告した上での督戦で、それが当たり前だが敵に漏れ、そのうえ如何にも派手好みの総督らしい行列を繰り出したがために、すぐに敵の標的となつた、といふ。

その上、敵に襲われた途端にヴュアミンは逃げ出し、そのだらしのない遁走に引きずられて陣が崩れかかつた。それを立て直すために、殿に戻つて戦つたジョイが、戦死したのだそうだ。

言いたくはないが、とジョイの友人は、歯軋りの音を立てながらつぶやいた。

敵に殺されたと言うよりは、無為無策でかつ無謀な総督に殺されたのだと言つていい、と。

その友人は、腕と足を折る重傷のために帰国を許され、包帯だけの体で、ジョイの遺髪と、死んだ日に着ていた衣服を宮殿内のナセアの元に持つてきてくれたのだった。

ジョイは即死ではなく、重傷の状態で自軍に戻り、死んだのどうだ。

「ナセアに、謝らなければ、と…」

それが最期の言葉だつたらしい。

それを聞いたとき、ナセアは氣を失つて倒れた。

それから一、三ヶ月の間は、ナセアの中では記憶がない。

葬儀を行い、戦場から送り返された彼の遺品の整理などをしながら、ただ泣き暮らしていただけである。好きで結婚した相手ではなかつた。

ただ家同士の間で決められたことに従つて、結婚すると決まつてから初めて会い、この程度の人か、と落胆するような思いでナセアはジェイに嫁いできたのだ。

夫婦となつてからも、顔を見てもときめきがあるわけでもなく、皮肉を言つても通じず、機知に富んでいるわけでもなく、怒ることもない。ただの歯ごたえのない男だとしか思えなかつた。

わざと困らせることがばかりをいい、わざと拗ねて見せたり無理なわがままを言い出しても、気まぐれに振り回しても、彼は怒ることもなく、ただ彼女の言うなりだつた。

そんなジェイを見ていて、じれつたくもうつとうしくもあつたナセアだつた。

それでもそんなふうに、懸命にナセアを受け止めようと努力するジェイの妻であることが、いつの間にか当たり前になつていつた。取り立てて特徴もない平板なジェイの顔を見ていることがナセアにとって気持ちの安定になり、居心地のいい夫婦の環境ができていた。ジェイがサンサに行つてしまつことになつて初めて、その居心地のいい環境を失うと知つて初めて、ナセアはジェイをかけがえのない人なのだと強く認識するようになつてゐた。

胸が高鳴るわけでもない、頬が熱くなるのでもない。そういう穏やかな愛情をジェイがいつの間にかナセアの中に根付かせていたことを知つた。胸を高鳴らせ、頬を熱くして口づけしたり抱きあつたりすることだけが愛ではなかつた。

ジェイとすこした年月がなければ、ナセアは一生それに気づかなかつただろう。

だから、ジェイが帰つてきたら、自分から、愛していると彼に言おうとナセアは心に決めていたのだつた。

そんなナセアだつたが。

二十五歳になつてゐる今、貞淑な人々からは白眼視される生活に浸

つて いる。

領地にはほとんど寄り付くこともなく、彼女はただキーウの屋敷と、宮殿内に与えられた部屋にばかり居た。夫のジェイがなくなつてからは、ますますグローセン領には足が遠のき、首都の中の屋敷にさえ赴かず、どちらかといつと宮殿内に住いしているようなものであつた。

常に恋人が三人は居た。だが長く付き合つた男は少ない。続いても一月程度。男を渡り歩くふしだらな女と貴族たちの間では好奇の目で見られるようになつてしまつて いる。

身分は故グローセン男爵の末亡人。父親はツイング子爵、母親は現王の庶腹の姉、従つて王の姪という血筋もある。

年齢にふさわしく豊艶な容貌に華やかな化粧を凝らし、誇りやかに実つた胸元を強調する衣装を身につけ、人を振り向かせずに居られない媚態を示す。間近に語らえれば、その蟲惑に抗える男は少ない。蜜が滴るような色香をたたえた、妖艶な女性そのものであつた。

昨夜は。

某国の大使の館から深夜に宮殿内の自室に帰宅した。帰宅することは明け方であつたり、あるいはその次の夕刻である」とさえある。ナセアとしては各国の大使は付き合いやすい相手である。妻を伴つていらない者ならなおさらである。任期が終わればいなくなるのであとくされもない。それにロティオール国内では珍しい品物を贈つてくれる。彼女より身分の低い男たちであるが、結婚するわけではないから、立場など関係はない。

どうでもいいのよ、とナセアは思つ。

どうにもつまらない時間をつぶしてくれるだけの相手で、少なくとも一緒に居る間に居心地が悪くなればそれで良い。相手が求めるなら身体など明け渡しても構わない。少なくとも彼女が付き合つている男たちにはそれ以上に感情の中に踏み込んでくるような者もいなかつたし、責任を負おうという者も居なかつた。

彼女も男に心の中のことまで踏み込んでほしいとは望まなかつたし、責任を持たせるつもりなども全くなかった。その場その場で顔だけでも笑つて過ごせればよく、要するに未来への期待は何も無いのだ。

思い入れたり、期待したりして裏切られるのは御免だ。そういう重たいものから開放されている状態に、ナセアにはなんの不満もなかつた。

貞淑であることを誇りにする女たちがどんなにナセアに苦情を言いい立てても、忠言めいたことを告げても、行動をあらためるつもりなどない。却つて、気ままに過ごせない貴婦人たちに、うらやましいのだろう、気の毒に、と言つてやりたい気持ちさえある。

あなたのためを思つて、と痛烈に苦言を呈し、それをさえ聞き流すナセアに背を向けた親しい人々も居た。

だが、誰が、私の何を知つていると言つのだらう。ナセアは髪を梳きながらつぶやいた。

この年の王の戴冠記念日の式典は、サンサとの戦中ということもあって、小規模に行われた。

その堅苦しい形式に則つた儀式のあとに宴席は、まだ堅さの残る始めの頃はナセアにとつては居心地の悪いものだ。付き合つている男たちも、そのときはまだ身分柄の座席について、妻の居る者は傍らに正妻を従えている。寡婦のナセアは一人である。

宴席が雑駁になつた頃は、ナセアは良く出入りしている詩の朗誦会のサロンの仲間などと壁際の一角に集まつて歓談をしていた。詩の朗誦会といつてもそれは名目上で、ただ集まつて食事をして茶を飲んで酒を飲んで語らうだけの仲間なのである。ナセアが付き合つたことのある男たちも何人かは居る。彼女は他にもいくつかの会合に行つているが、そういう人々の中から関係を持つ男性を見つけるのである。

ナセアは顔も見たくない人間がこの場に居ることにいらだつている。

なぜか、サンサの戦線から離れ、総督であるはずのヴェアミン大公が居る。

身分も高く、また回りにかしづく人間を従えるのが好きなヴェアミンだけに、大勢の取り巻きに囲まれていた。

その中には彼自慢の長男のラステロスと、特に自慢にしている娘のワナンが居る。

ラステロスは父のヴェアミンが喧伝するほどには立派な少年ではないことは既に周知のことだが、一四歳になるワナンは宣伝どおりの美少女であった。

彼女の美貌は、生まれながらの質もあるのだろうが、おそらくは有り余る財を投じての手入れの賜物である。卵形の輪郭の頬が柔らかに微笑みを作っている。悪戯な光を湛えた青い目も大きく、瞳を彩る睫毛も豊かで、鼻筋も細く通つており、唇の形も美しい。少女にしては紅が濃いかもしだれなが、腕の良い化粧師を雇つているようで、描かれた眉の弧も実に愛らしい表情を見せていた。

衣装にもいやみなほど贅を尽くしている。つややかな金髪に、あふれんばかりの宝石をつけたティアラを載せ、細い滑らかな首周りにも重たいほどに宝石をまとわせ、光り輝かせている。ドレスもまた、高価な薄絹を何枚にも重ねたスカートは微妙な桃色を軽やかに奏で、彼女が身動きをするたびに柔らかく魅惑的にゆれていた。

ヴェアミンの「取り巻き」になる何々伯爵だのなんとか子爵だのが居り、それと共に、その奥方や令嬢はワナンの取り巻きとしてかしづいていた。

ワナンの取り巻きの中に、異色の存在がある。

所在ないような戸惑つた表情で、ワナンに左腕を掴まれて立つているだけの少年。光沢のある水色の上着に、細身の濃紺の下着<sup>スボン</sup>。上着の衿元と裾まわりの刺繡に細工を凝らしてある、贅沢な衣装であつた。

その贅沢な出で立ちにも引けを取らないほど、少年の容貌が際立つて美しい。その少年が誰であるか、は、ナセアだけでなくこの場の誰もがわかつていて。先ほどまでの式典では、彼は身分柄の位置に座があり、そこの席についていたからだ。

第一王子のソント公こと、ラシアヴィラム・ダレイス・カザである。まだまだ少年ではあるが、成人にも扱われる一五歳になり、ようやくソント公として公の場に姿を現したということだろうか。

ロティオールのこの場に居ない貴族も、この場に出席できた貴族も、じうじつた場に出てきた「ラシャ王子」をこれまでには見たことが無かつただろう。

ラシャ自身、宴にあまり出てきたことが無いだけに、顔見知りも少ないらしく、ただ、いとこのワナンに腕を掴まれながら落ち着かない顔で周りを見回していた。

誰もが、彼を見つめている。ナセアも興味を持つて美貌の王子を見ている。

ラシャは、彼の母親のような卵型の輪郭の中に、やや鋭いが涼しげな眼差しの青い瞳を藏している。凜々しい眉、高く通つた鼻筋、緩みの無い唇、何をとっても彼の周りの娘たちよりも華麗な容貌であった。

それでいて男性的なのは、肌がよく陽に焼けて浅黒いためだろうか。つややかな黒髪がその美貌をさらに神秘的にさせていた。

まだ一五歳という年齢もあり肩の線が細いが、高くしなやかに天に伸びた肢体は、均整の取れた彫像のようだった。

誰もが眼を奪われる美貌である上に長身のためラシャはさらに目立つ。

つまらなそうに周りを見渡し、時折、ワナンに話しかけられて一言一言をかわす。それからワナンと言葉を交わしていたらしい他の人に一瞥を与えて、またよそを向く。そんな仕草を繰り返していた。周りを見渡していたラシャと、それを遠望していたナセアと視線が合つた。礼儀としてナセアはすこし頭を下げて会釈をする。ラシャが合点の行つた表情で同じように少しだけうなずいた。一年ほど前に一度だけ会つたことを思い出したのだろうか。

直後に、ワナンがナセアを見て、険しい表情でにらみつけた。

「あんな方に挨拶すること無いわ。の方はね、ふしだら、なんですかって。お父様もお母様も皆様もそう言つてゐるわ」

ナセアの耳に届くほどに鋭い声であった。同時にワナンはラシャの手をさらに引いて、ナセアのほうに背を向けさせた。

ひどく辱められた形になつて、ナセアの扇を持つ手に力がこもつ

た。

ちやほやされているだけの少女に、嘲笑された。

それだけではない。

誰のせいでも亡人になったか、あの少女は知っているのだろうか。無能な指揮官であるヴェアミン大公、つまりワナンの父親のせいで、ナセアの夫であるジェイは死んだのではないか。そのためにナセアは今のような寡婦になった。知っているのだろうか。

他の誰に見下されても笑つて聞き流せるナセアだったが、ワナンには、と言うより、ヴェアミンに近しい者には言われたくなかつた。何がわかつているというのだろう、世間知らずの甘つたれの小娘め。ナセアは大声で叫びそうになるのを懸命にこらえた。

大きな権力をもつヴェアミンに逆らうことができない身分の悲しさが、辛かった。

「失礼……」

ただそれだけを告げてその場を立ち、バルコニーに出るだけで精一杯である。

憤りに鼓動が激しくなっている。

バルコニーに出ても、どうこつわけか室内のワナンの高く澄んだ話し声ばかりが聞こえている。陰りの無い、無邪気な声。何一つ疑うことなく、ヴェアミンという大きな庇護の下で、わがままに真っ直ぐに、自分を矯めることなく育つてきたのだろう。よいものは良い、悪いものは悪いとはつきり言える、素直な性情なのだろう。

だからふしだらと称される女は悪いもので、彼女は堂々とそれを懲らしめただけ、誇らしく自分の純粋さを主張しただけなのだ。ふしだらな者が傷つくのは、自業自得だ。誰も彼女の正当性を疑いはないのだ。

しかしそれはただ恵まれた者の論理ではないか…。ナセアは欣然としない。憤りよりもむしろ哀しみが胸の中に広がつていった。じつと立ち止まっていては泣けてくるので、ナセアは広いバルコニーを柵にそつてゆつたりと歩きだした。夜風が頬に冷たい。

宴の間に飲んでいた酒も少し醒めた。

広間にはまだワナンが居るだろう。ワナンが居なくとも、ヴェアミンは居るだろう。もう彼らと同じところに行く気はしない。

俯きながらバルコニーを端まで歩き、廊下に出口つかとしたところ。

すれ違ひざまに、人にぶつかつた。

「これは失礼…」

ひどく高いところから声がしたように思つた。見上げると、それはラシャだった。

「いらっしゃる。申し訳ございません。どちらかへお急ぎですか？」

「否や」

「それではお帰りですか？」

「勝手に帰つて良いのかどうかわからないんだ」

滅多に宮中の行事に出たことが無いラシヤらしいと思つた。

「陛下にお暇はなさいましたか？」

「だいぶ、前に」

「どなたも教えてくださらなかつたの？陛下にお暇がお済みでしたら、お帰りになるのは構わないと思いますわ。」

それを聞いて、ラシヤは露骨に安堵のため息をつく。

「そんなに、お疲れですか？」

「つまらなかつた」

ナセアはおもわず笑つてしまつた。唇に指を当てる笑いながら、自室までの道を共に行こうと誘つた。

ラシヤと肩を並べて歩いている姿を、ワナンが見たらどれほど嫉妬するだらうと想像するだけで、先ほどの悔しさが晴れた。

道すがら、改めてナセアは名乗つた。「ソントに来たのは、昨年だつたか？」とラシヤは一応彼女を覚えてはいたようだ。

それよりも彼女は、彼が今回の宴に顔を出した理由を知りたく、それを質問した。成人とみなされる年齢になつたからか、と聞くと、そうではないと言つ。

一ヵ月ほど前にレスフォに滞在したワナンが、ついでに訪れたソントでラシヤに会い、その後は手紙で彼を執拗に誘い続け、衣装を送り、迎えをよこし、はなはだしくは彼を騙つて王に對して出席の返事まで出しておいた、ところでのやむを得ずに出でてきたのだと言う。

一四歳のワナンはよほどこの一年上の従兄のラシヤに執心のようだ。

そう気づいたナセアは、ふと、このラシヤをワナンから奪つてやうつといつ考えにたどり着いた。

ナセアはラシヤを自室にこざない、閉めた扉の前で、彼の耳元に

かされた声でささやきかけた。

女を知らないなら、教えてさしあげましょつか…？

硬直したラシャの胸に頬を寄せ、しなやかな背中にナセアは腕を回して抱きしめた。豊かな胸の隆起がラシャの身体に強く押し付けられている。

思春期の少年は、狼狽したまま、ナセアの蟲惑の中に簡単に墮ちた。

夜明け近くに、ナセアは眼を覚まし、傍らのラシャを起こさぬようシーツを脱け出してローブを羽織った。

髪を指で梳かす。幾度と無くラシャが指を絡めたために、乱れていた。

小さなため息を吐きながら寝台を振り振り向くと、寝返りを打つたラシャが、薄く眼を開けて彼女を見ているようだった。

「朝なのか…？」

「もう少しでね」

ラシャが手を伸ばし、ナセアの指に触れる。

「俺は、どうしたら…？」

「まだ少し居て良いわ」

ゆっくりと起き上がったラシャが、ナセアの手を胸元に握りこみながら、

「そうではなく

と言った。

ひたむきな眼でラシャはナセアを見つめている。彼の端麗な面差しの思いつめた表情を見ると、魅入られるよつた胸の痛みを感じた。

「王子様は何をおっしゃりたいのです？」

おどけたように敬語を使うと、ラシャがひどく拗ねた顔をする。

「ずっと、ナセアと離れたくない」

少し口ごもりながら、切れ切れに彼は言つ。薄暗いが、頬を紅くしているのはわかつた。

普段のナセアは、遊びなれた年上の男性との予定調和の付き合いしかしていない。

まして十歳も年下の少年の、初めての女性、となつたことも無い。情事の後で、離れたくないなどという言葉は100回も聞いたが、ラシャほど熱い眼差しで言つてくれた男は今まで居なかつただろう。眼差しで彫像さえ蕩かしてしまいそうな美少年に熱く見つめられて、ナセアも悪い心地ではなかつた。

「結婚、すべきだろうか。こうなつた以上は、父上に許しを得て…」数十秒の逡巡の後に、さらに切れ切れにラシャは言つた。

ナセアは一瞬だが目の前が真つ白になつた。ラシャの発した言葉が音としてしか理解できなかつたのである。

何度か頭で反芻するうちにようやく、ナセアの中で彼の言葉が意味を成したとき、驚愕はなお大きくなつた。

ただ一夜を共にしただけで、結婚と言つ言葉が出てくるとは。

ナセアのみならず昨今のロティオールの社会にはありえない。彼女の中にはそういうある意味で常識的な意識があつた。だから混乱し、返答に詰つた。

ただ沈黙したナセアの前に、ラシャが寝台から降りて跪く。美貌の王子はナセアを崇拜するように、陶然と見上げながら、最前から握つたままの彼女の手の甲に接吻した。

「じうじうとき、どうしたらしいのかわからんんだ」

眉をひそめて、ラシャは悲しいような甘えるような眼差しをした。声さえも震えている。

「…無理よ」

ナセアはうろたえて口走つた。唇からその音が漏れた後に、少し間をおいて、

「私は、もう故人とはいえグローセン男爵の夫人で、まだその縁は終わつておりません。それにそもそも当代の第一王子のあなたとは釣合いがとれる身分でもありません。…まして、私はあなたより一

〇年も歳をとつていますわ

低い声でラシャに道理を諭すように言い、言葉の途中で何度も首を横に振った。

「年齢的にも、『身分柄でも釣合いが取れるお相手としてラシャ様にお似合いなのは、お若くお美しいワナン様のような姫様でしょう。』

「ワナンなど、関係ない」

身分も、年齢も関係が無い、とラシャは、ナセアの語尾にかぶせるように強く否定する。

それを聞いて、目を伏せて皿蓋を震わせながら、ナセアは悦を覚えている。

暗闇の中で躊躇いがちにナセアの肌に触れたラシャの手を誘つたのは、そもそも宴の席で彼女を「ふしだら」と嘲笑したワナンの想い人である彼を身体で奪い取つてやろうという目的を持つての行動だった。

純潔の淑女を誇る小娘のワナンであつても、誰よりも先に恋したラシャの接吻を受け彼の腕に抱擁されることを夢見ているのだ。いずれ時季が到来した折には、と彼から求められるように遠まわしに策を弄することが、ワナンなどの淑女気取りの女たちのたしなみなのだ。

所詮、遅かれ早かれ為すことを為すのである。それを心の底から望んでいるくせに、直接に具体的な行動を起こすものを「ふしだら」とあざ笑う。

それがどうだ。

高慢ちきな小娘が心底では欲している行為そのもので、彼女の想い人をナセアは奪つてやつた。彼はナセアに対して跪いて求婚までしている。

ワナンなど関係がないと否定したラシャの言葉を、そのままあの淑女気取りの小娘に聞かせてやりたいものである。心中で快哉を叫

んでいた。

しかしながら、ナセアにとつても予想外だったことがある。ラシヤがひたむきに彼女を見つめていることだ。

胸が痛くなるほど真つ直ぐな、熱を帯びた強い瞳。

昨夜。

何の予兆もなくナセアに触れられ、狼狽した彼に向かつて、ナセアは、男と女が愛し合う行為の実際を、身をもつて説いた。そこに生じる心身の変徴も当然のことだと耳元に囁きかけて、彼の羞恥や理性などと言つたものを、本能の下に沈めてやつた。

とても簡単なことだった。

それよりも、ラシヤからのこの求婚への返答のほうがずっとずっとナセアにとつては難問である。だからといって、ワナンの高慢な鼻を折つてやるのをしてラシヤを誘つたとは、もう言えない。

ラシヤは、ナセアと離れたくない離れられないと呟くように訴えている。やがて立ち上がりて彼女を力を込めて抱きしめた。

「考える時間を下さいませ」

ナセアは懇願した。胸がひどく痛んでいる。

世間知らずのぼうやは話がわからなくて鬱陶しい、といつ冷めた思いと、ワナンへの腹いせに誘惑しただけなのに、それと気づかず、ナセアとこれからも愛し合うのだと無邪気に信じるラシヤへの罪悪感が、彼女を一分していた。

とにかく、ラシヤには陽が昇りきる前に自室に戻るよう促し、この一夜のことは、時が来るまでは誰にも、たとえ彼の従者や親友や父親と言えども絶対に内密にすることを約束をさせた。

それから数日。

ナセアはその間にモー・ミの宴に出席した。まだ誰にも彼女とラシヤに関係が出来たことは知られては居ないようだった。

その宴の一つにワナンも出席していたが、ラシヤは居なかつた。そして相変わらずワナンなどその一群れの連中はナセアを見下す態度をしているようだ。

その様子を見る限り、ワナンもあの一夜のことを知らないと見える。

あの時にナセアがもぐらんでいたのは、ワナンがラシヤを奪われたことを知り、泣いて悔しがる姿を見てやりたいといつうことだったが、それは未だに叶っていないことになる。

しかし今のナセアは、あの秘め事が知られていないと心底から安堵しているのだった。

田を追うことにナセアの中ではラシヤに対する罪悪感が増していく、また他の懊惱も加わって眠りさえ妨げられるほどの悩みになつてている。

これまで自分の行状がラシヤに知れることが何より怖い。そしてあの夜の彼とのこともいつもの遊びと思われ、彼に軽蔑されるのは、と疑つた。それが恐ろしくてたまらなくなつてしまつていて。

その恐怖が何故かなどと、ナセア自身は心の中ではぼかしていい。自分自身を見つめなおしたことがない小娘ではない。

ラシヤという10歳も若い少年に、ナセアは恋愛を感じていて自覚していた。自覚し、怯え、苦しんでいたのだった。

恋愛に眼を潤ませた憂い顔のナセアは、常よりもさらに艶色を増して悩ましい。

常によく付き合っている恋人の何人かが彼女を誘つたが、気乗りがしないと言つてずっと断つていた。

そのくせ宴の間に立ち上がりなくなるほどに酒を飲み、結局は恋人の誰かが彼女を連れて帰り、男は彼女を当然のように抱いた。ナセアは嫌だと断り、伸ばされた手を拒んだが、それすらも男たちは興趣として悦び、彼女の嗚咽を悦楽のものと決め付けるのだった。

宴やサロンに出て誰か男性を伴つて一夜を過ごす。

はたから観れば、それはこれまでのとおりの彼女の日常である。何の変哲も無い常の行動そのものであった。

ナセアはそんな暮らしを繰り返す自分を嫌悪し始めている。

清冽なラシヤの瞳に出会い、自身の行動を初めて省みて、愕然とした。

霧の深い森の中で彷徨しているときに、不意に明るい陽光に照らされて、自分自身の裾が汚濁にまみれていることに初めて気づいた迷子のようだった。あまりの汚れを恥じて、光の当たる場所からまた森に潜り込んでしまったような、そんな気持ちになつた。

あの時はラシヤも惑乱していたのだろうが、冷静になつたときにナセアのその裾の汚れに眼が行き、彼はきっと眉をひそめて彼女に触れたことに後悔するに違いない。彼女をさげすむに違いない。

「馬鹿…」ナセアは不意につぶやいた。汚いことと承知の上で、誰かの夫だろうと婚約者だろうと、むしろそういう者を選んで、誰とも構わずに情事を繰り返してきた。

生臭い泥沼の中に旋毛の上まで浸かっている。

そんな自分が、あの穢れない眼差しのラシヤに寄り添えるなど有り得るはずが無い。彼の言葉にほんのわずかでも頬を染めるなどおこがましいことこの上ない。

それに彼と関係をもつたことも、まずは遊び、ワナンに対する腹いせだったのだから。

ナセアのこれまでの行動や、あの一夜は、亡き夫の仇の娘のワナンへの当て付けだったとラシャが知つたとしたら、彼はどれほどナセアを軽蔑するだろう。どれほどひどく傷つくだろう。

その想像が震えるほどに怖かった。

その蔑みと傷心の視線に、彼女自身が耐えられる気がしない。

「ねえ、助けて…」

胸の下の男に、ナセアは懇願した。

男は40半ばの中流貴族である。ロティオールの東側の半島を挟んで存在する大国ザイラオンとの間の、島国ティーランという国の公使という役でこの国にいる。

ティーランは面積こそ小さいが、立地が良く、近辺の国々の交易の仲介ができる利点があるために、国全体が大きな商業都市のような殷賑の国である。様々な国の商人や貴族もティーランに拠点を置くこともあり、雑多で自由な国である、と公使の彼はナセアに説明したことがあった。

「助けて、とはどういふことです？」

男はナセアの髪を撫でながら丁寧に訊く。

彼にとつてのこの若く美しい恋人は、ロティオール王の姪という眩しい様な血統の持ち主なのだ。おのずと交わす言葉は彼が敬語になる。

「… そうね、また今度話すことにするわ」

四日後、ナセアは珍しくグローセン男爵家の領地に赴いた。キーウを昼に出発して夜に領地に着き、一泊してまたキーウの富殿に戻った。

富殿の自室にナセアが戻ったのは、月が中天に昇っている頃である。

思い起こせば、月があるうちに自室に居ることは少なかつた。ラシャとのあの一夜のあとは、意識的に自室に戻らないようにしてい

た向きもある。

侍女たちに手伝わせて就寝の準備をしたのち、彼女たちを下がらせて寝室に入った。寝台の脇の明かりを消し、床に就こうとした。窓にコシンと何か当たった音がした。

絹のローブをざわざわさせながら、早足で窓辺に行く。バルコニーの下にいる、長身の影がゆらりと動いたのが、闇の中に見えた。呼吸も忘れてナセアは急ぎ窓を開け、欄干から身を乗り出した。そして下へ向けて手を伸ばす。

その人影はナセアの手を取ることも無く、壁の装飾を伝つて軽々と階下からバルコニーの欄干を越えて、彼女の傍らに立つた。コードを取るまでも無い。ラシヤだった。

ナセアはまるで坂を駆け上ったように呼吸を乱している。鼓動がのどから出てしまいそうな、胸の高鳴りを感じた。

「早く、中へ」

強い力でラシヤの手を引き、ナセアはそれでも用心深く足音を忍ばせて寝台まで走った。

「どうして、ずっと、半月も居なかつたんだ？」

責めるよりも悲しげにラシヤはナセアに訊く。

もつれて倒れながら、ナセアは、今はそんな話をするより一瞬でも長く、と言い、彼のうなじを引き寄せて唇を求めた。

ナセアが恐れたとおり、ラシヤはどうやらあの夜から毎夜、今夜のようになるとバルコニーの下から彼女の寝室を見ていたらしい。侍女たちが時間になれば明かりを灯すのは、主が不在であつても行われる慣習であるが、主がその寝室を使わなければ夜が明けて侍女が寝室に来るまで消されない。

彼はずっと、消えない明かりを見上げて、地面上で夜を過ごしていったのだという。

昼間は兵学校に行かねばならないため、空が藍色を帯びてくる頃にはさすがに自室に戻っていたそうだ。ナセアが戦慄するほど之情熱だ。

それでこの半月の間にナセアは何をしていて何故自室に居なかつたのか、といふ話柄になると、巧みな仕草で彼を乱して言葉を遮つた。

そんな話は後にして、お願ひ、とナセアは言へ。

「ナセア」とラシヤが彼女を呼ぶ。その声は、呼ばれた本人にも切なく響いた。

多くの言葉を語らないうちに、別れなければならぬ刻限になり、縋り付くような表情のままラシヤはナセアの元を去つていった。

彼が去つた後の窓辺で、

「愛している、か…」

ため息と共にナセアはつぶやいていた。

たつた今去つた少年にとつては、瑞々しい響きを持つた聖なる言靈で、ナセアにとつては単なる誘い文句だった。その溝はどうやっても埋まらないのだ、と彼女は諦観している。

今ナセアは自分自身をさえ軽蔑の対象にしていた。

ラシヤの純粋な瞳を見つめて、彼を誘惑したことを後悔している。罪悪感に苛まれながらも、謝罪をすることもできずにいる。もし謝罪したのなら、ラシヤはひどく傷つくだろう。そしてナセアを軽蔑し、嫌悪するに違いない。彼女を見る彼の眼差しの色合いが変わることを、間近に見たくなかった。

その日からナセアは夜宴や会合の誘いをすべて断つた。自室で休むようになり、深更に密やかに訪れるラシャを夜毎迎え入れた。

昼間は、以前のように夜の宴に向けての化粧などの準備に費やすことも無く、珍しくテーブルに座つて書き物をしているのだった。そしてその書いたものを侍女に託し、方々へ便りを出している。

そのうちの一つが、叔父であるヴァルト・オーディアス王への面会の申込であった。

ナセアが王に個人的に会うのは、ジョイと結婚して間もない時期以来である。その日、約束は夕方であった。

王に会う約束を取り付けたナセアは、その時刻に間に合つようになつて、身支度を整える。彼女の魅力である豊麗な曲線を強調することなく、胸元も開けず、色合いも紺色を主体にした地味な服を選んだ。衿と袖の周辺とサッシュ、それにドレスの裾に光沢のある白いリボンをあしらつている。髪もカールを垂らすこともなく上のほうに小さく結い上げた。

アクセサリーは大粒の真珠の首飾りと、髪飾りだけ。ナセアの褐色の髪には白い真珠が良く映える。

そんな姿を鏡に映して、ナセアはふとため息を吐いた。

髪飾りは、かつてジョイにねだつて手に入れた南方産のものだ。真珠は、ジョイに似ているとナセアは思つ。

磨かれた石のようにまばゆく光を跳ね返すものではない。強い光を吸収しているかのように眼に優しい光を放つのである。

柔らかな曲線の輪郭にやや目じりの下がった大きな眼、睫毛が長

く濃く、夕闇のような蒼い瞳に影を落とす。水を含んだようにふくらした唇は拗ねたように少し尖つていなまめかしい形をしていた。化粧はいつもに比べればずっと薄い。彩りも飾りもほとんど排除した状態でも、ナセアは十二分に美しいのだった。

「この姪と面と向かうのは何年ぶりかと王は思った。

前王の正妃から生まれた王は、身分の低い女性から生まれたナセアの母親である異母姉とは疎遠だ。ナセアもまた王に近しいというほどの身分ではない子爵家の娘に生まれ、さして地位も高くない男爵家に嫁いだ。姪、といつよりは一般的な貴族の情報として、王はそれを知っていた。

また、結婚前のナセアと、寡婦になつたナセアの艶麗が派手であつたために、姪といつより話題の女性としての彼女を知つてゐるだけのことだ。

なるほど、と思つ。紺と白といつ清潔感あふれる色彩をまとつてゐるのに、彼女から発散される気配は、清々しさよりもねつとりまとわりつゝような色香である。その微笑みも喉に粘質のものが絡みついたような媚があふれ、どこか扇情的で、王を落ち着かない気分にさせた。

「珍しいことだな。どうこつた用件であらう？」

王はやや素つ氣無く言つ。

「いくつかのお願い事がござります」

冷たい口調の王にすこし逡巡しながらナセアは答えた。

自覚も無く普段のように男を惑わせるような微笑を浮かべ、その技が通じなかつたことであつたえている。

よく考えれば、叔父である王に対して媚態を示したところでなんの益もない上に、事務的な話をする場でのそういう態度が逆に不快感を与えることもわかる。それでも媚を浮かべてしまつことは既に身から落とせない垢のよう習い性になつてゐるのだろう。

「私の姉にティーランに嫁いでいる者が居ります。その姉から彼の

地での再婚の話をもらいました。陛下にもお許しいただきたく存じます」

ナセアは、傍らに控えている侍従に、持参した手紙を王に見せるよう預けた。

その手紙を一瞥し、相手の素性などを見てから、なるほど、と王は言った。

「そなたも寂しい思いをしていたのだろう。許す」

「ありがとうございます。次のお願いですが、現在は私はグローセン男爵夫人のままですが、その身分を返上し、ただのツイング子爵家の娘に戻つてから、ティーランに参りたいと思うのです。そして、嫁ぐまでの間、できれば後宮に身を移したいのですが」

一旦言葉をきつてから、すこし視線を外して、今までの不行状がありますから、と言つた。

後宮ならば男性は入り込めない。彼女なりの裸きのつもりなのだろう、と王は判断し、それにも許可を与えた。

「さりにお願いがあります。グローセン男爵家の跡なのですが」

ジョイが亡くなつてからはナセアが主不在のまま、男爵夫人という立場で領地を持つてている形になつていた。それは遙かに低い身分であるとしてもナセアが現王の姪という血を持つている故の暫定的な措置で、ジョイの弟で他家の跡を継いでいた者に子供が一人以上できたら、その一人にグローセンを継がせる予定であった。

ナセアは、王の前であるにもかかわらず、頃垂れて大きなため息を一つ吐いて、また大きく息を吸つた。

その仕草に瞠目する王に再び向き直つたナセアは、

「先の主、ジョイにはセロという名の庶子が居ります。近く五歳になります。その子に跡を取らせたく、お願ひします」

悲しいような切ないような、それでいて決然とした表情で言い切つた。

「侍女と共に控えております。お目通り願えますでしょうか?」

「許す」

背後の侍従を振り返ると、心得た顔で、ナセアの控え室に向かって去つていった。

王が見るとこり、ナセアは肩の力を落としているようだった。

「庶子は、いくつになると？名は？」

「今はまだ四歳です。まもなく五歳になります」

「後見は？」

ナセアが答えた名前は、王が覚えて居ない下級貴族の名前であった。

ジェイの最期の言葉と彼の遺髪を届けてくれた友人である。

つい先日、ジェイの弔い以来初めて彼に連絡を取つたのだ。

彼は戦傷のために足が不自由になつており、杖が手放せない身上になつてしまつていて。それでもジェイの親友であつた彼は、ナセアからの庶子の後見になつてくれと言つ申し出には快く応じてくれた。

彼の名はサイオン・ホールーといつ。爵位は無く、騎士という最下位の貴族である。年齢はジェイより2歳年長で、現在は32歳に成る。妻も居る。だが子供は居ない。

ナセアは

「貴族の方を執事に出来るような家格ではありませんが」と断つた上で、ジェイの子供の後見を頼んだ。執事としてグローセン男爵家に夫婦で住み、庶子を養育して欲しいという願いであつた。穏やかにサイオンはうなずいて、喜んで引き受ける、と言つてくれた。

「…案じておりました」

「ご心配を申し訳ありません」

ナセアは、自分自身の不行状は、サイオンのようなどうより、彼と似た性情のジェイのような人物には許しがたかっただろうとわかつている。

だが、誰が、彼女の心の何を知っていると言つのだらう。

「私は、知らなかつたのです。あの日まで、あの子の事なんて」

ナセアがジョイの庶子の存在を知ったのは、ジョイが亡くなつてから1ヶ月ほどたつたときであった。

首都キーウでジョイの弔いを終え、彼の残した様々の物を整理するため、彼の生前にも滅多に近寄つたことの無いグローセン男爵領に赴いた。

そこでナセアを迎えたのは、以前にキーウの屋敷で勤めていて、ナセアの宝飾品に手を付けたために辞めさせた侍女であった。

その侍女が、庶子セロの母親である。

彼女の胸に抱かれたセロは、認めたくなくともジョイに面差しがとてもよく似た男の子だった。

ナセアはまつたく知らなかつた。ジョイが、まさかあのジョイが、ナセアの知らない所でナセアに秘密のままに子供まで生ませていたとは。

胸に手を当てながら

「誓つて申しますけれど、今の私の口から言つても信じてもらえないかもしませんが、ジョイと結婚してからは本当にジョイだけを愛していました。本当です」。たくさんわがままを申しましたけれど、私はジョイを裏切つたことなどありませんでした

乾いた声で、あの子のことを、とナセアは言つた。

「サイオン様はご存知でしたのか？」

「…まあ、そうですね」

「あなたも、ジョイと同じね。裏切り者ね。酷い人」  
寂しげな微笑から、サイオンは眼を逸らした。

子供が来るまでの間、王はナセアの話を聞くとも無く耳に入れて

いる。

「私は、あの子のことなんてまったく知りませんでした。誰も教えてくれなかつたし、ジェイも黙っていました。侍女の話によれば、子供が出来たこともただほんの一度の過ちだつたと申しておりました。生活の面倒は見ていましたが、屋敷に入ることも、ジェイに拒まれていたそうです」

いま考えると、ジェイのしたことは冷たいことだ。

侍女はキー・ウの屋敷を放逐された後、行き場を失つて、グローセン領に向かうジェイの馬の前に飛び出し、懇願して下働きの使用人として領地の館に住むことを許された。そのジェイの許可を非常に恩に感じていたという。

その恩が、ジェイへの思慕になり、彼が湯浴みをしているとき、忍び込んで関係を持つた。しかし本当にその一度きりだった、と侍女は言つた。

妻のナセアを裏切つてしまつたことをジェイがひどく悔やみ、苦しみ、侍女にむかつては一度と顔を見たくない、とまで告げたという。それでもさすがに子供が産まれたときには、侍女のもとを訪れ、生活だけは保障すると言い残し、その後は母子はほとんど捨てておかれた。

サイオンは、ジェイが戦場で亡くなるときこそそのことを初めて聞いたと書く。

「捨ててしまつた子が居る、と…。それからそのいきさつを聞いて…。もし他の誰からセロのことを聞いたら、あなたが悲しむかもしれないから言わないでくれと…。ただあなたを一度でも裏切つてしまつたことを悔やんでも悔やみきれないと」

「何と言つても、もういまさら仕方の無いことね」

ジェイはもう亡くなつてしまつたから何も弁解することも出来ない。不在の場で彼の残した物事について苦情を言うのは不公平だろ

う。

「世の中には浮気ばかりする男の人が多いけど、ジョイは絶対に心配ないと信じていました。…でもそんなジョイでさえ、あのような卑しい、そして美しくも無い女に手を出してしまったんだから、男の人なんてそんなに簡単なかじらうって思いました。…そしたら、本当に簡単でしたね。」

ナセアはサイオンとその妻に向かって、すこし毒のある表情で笑つて見せた。

「どんどん側妾や愛人を増やすような人も居るのに、ジョイは生真面目でした。自分の過ちも許せないくらいに。もう少し不真面目なひとだったら、あの子達を捨ててしまうような、そんな冷酷なまねはしなかつたかもしれないですね。産まれてしまったのなら、その子に罪は無いのに。馬鹿なジョイ」

氣の毒ね、と微笑みながら、ナセアの頬に涙が伝つていた。

「私が産みたかったな、ジョイの子供…。馬鹿で、いいから咳いてから、ナセアは黙つた。とめどなく涙が出てきたからであつた。

滯りなく王とセロとの対面も終わり、ナセアはセロやその母に何を告げることも無く臥室に引き上げていった。

呆然とするほど、ナセアはぐたびれている。王と話した時間は短かつたのだが、彼女にとつては負担の多い内容だった。

ほんのひと月前までは、苦痛を避けるためにナセアの心の中から放逐されていたことばかりを、王に話したよつなものであった。

「終わった…」

日没もすっかり過ぎ、夜になつていた。

ローブではないがゆつたりした部屋着のままで、疲労のためかナ

セアは寝台で眠つてしまつていた。

夜中に窓辺で小さな音がしたときに、まだ問題があつたことに気づいた。

「開けてくれ」

という、ラシヤの声である。

彼に何と告げたものだろう。その答えを見出すことが無いまま、ナセアは窓を開けてラシヤを迎えた。

まだ一五歳の少年は、はにかみながらも、眼を輝かせていた。

彼には初めての思い、初めての異性、知り始めたばかりの愛というものに打ち込む喜びに、純粹に心を浸しているのだろう。

ナセアは、一つの傷さえ付いたことがない宝玉のようなラシヤの透き通つた視線が痛いほど眩しかった。

眩しく、羨ましく、いとおしく、そしてどこかひどく、憎かつた。

夜半になりいつも通り名残惜しげにラシヤは帰つていった。

次の夜も訪れるだろう。当然のようバルコニーを登り、窓を叩くのだ。

この朝に、ナセアはグローセン男爵家が宮廷にもらつていての部屋から荷物を一切引き払つて、後宮へ移つた。

そして、そのことをラシヤには一言も告げなかつた。

ナセアは、逃げた。

やがて知るだらう彼女の様々の行動に対するラシヤの失望の眼差しから、逃げ出した。

後日、ロティオールを離れる船の上から水面の光を見ながら、少しだけナセアは泣いた。

あえて目を背けていた清らかな気持ちを思い出させてくれたラシヤへの想いと、そして何より、誰よりもナセアを愛してくれていたはずの亡き夫ジェイと過ぎした日々へ想いの、決別の涙であつたかもしれない。

新しい土地で、ジェイがナセアを愛してくれたように、今はまだ見知らぬ夫を愛そうと思った。大丈夫、きっと幸せになるわ。そんなことを唇の中で呟いた。

次の夜。

ラシャはカーテンさえも取り払われた空っぽのナセアの部屋を見て、ただただ呆然とし、頭を抱えて自分の部屋へと戻つて行つた。

次の夜もそうだった。

ナセアに秘密だと念を押されている。周囲の誰にも彼女の行方を尋ねることは出来ない。また尋ねたところでラシャの周囲の人間がそんなことを知っているとも考えられず、ただ、七日間、ラシャは虚しくナセアが住いしていたはずの部屋を夜半に訪れ、ただ帰つてきていた。

彼女が居ないのだとよつやくラシャが納得したときに、七日が経つていた。

このひと匂足らずの間。

妙に浮き立つた様子でそわそわしたり、そつかと思えば急に意気消沈したりしているラシャの様子を、彼に仕える小姓のゴーレウスや近侍する兵士のデイアファイユは怪訝な目で眺めていた。

だからと言つて聞いただしはしない。それでもラシャがどうして拳銃不審なのは、二人にも何となく見当がついていて、それゆえにこそ黙つて見守つているのである。

「ラシャは好きな人が出来たんだろうねえ、デイア」

ラシャより一つ年下だが、早熟なゴーレウスは口元を緩めながらそんなことをデイアと話す。デイアは既に二十歳であるから、ゴーレウスよりも先に気づいていた。

ただし二人ともその相手はワナンだと思いこんでいる。

ワナンに誘われて宴に出て、その次の朝、夜明け近くに帰つてきて、それからすぐにラシャの様子が奇妙になつた。

それにゴーレウスもデイアも、ワナンの顔は見知つている。まず彼らが知る中では最も美人だろうと思つていた。ラシャが恋したのはワナンだと疑つていはない。

ただ、不審なこともある。

あの後のワナンの誘う宴などにまつたく顔を出しても居ない。もし彼女が恋する相手であれば、会う機会を逃すまいとするのではないかと思われるのに、である。

もともとそういう場に出たことも無く、むしろ避けて通つてきたラシャである。あの日は王の戴冠記念の式典だからこそ出席したとも言えた。

その後にワナンの使者が届けてきた何々公爵の誕生祝だの、何々

伯爵夫人主催の音楽鑑賞会だのと言つた会の招待状は一見して即座に捨てていた。行かなくて良いのかといつて「ティアやコーレウスの問い合わせに、ラシャは何故そんなことを訊くのかといつような表情で、必要ないとだけ答えていた。

老練な側近でも居れば、とにかくどのような集まりにでも顔を出して人とのつながりを作り、自分の利益のために情報交換をする社交の効能に對しての必要性を述べたかもしない。ラシャのみならず、ティアやコーレウスも含め、彼等の年齢の若さではその辺りには疎くても仕方がない。

そんな社交などよりも、軍学校で訓練に明け暮れて肉体を駆使しているほうが楽しい年頃であつたし、ラシャは人一倍そちらのほうが好きな性質であるのは明白だった。

その好みを覆すほどにはワナンに惹かれていないのかな、などとラシャの居ないとこりでコーレウスがひつそりとティアに呴いていた。

ところがラシャがひと匂いぶりにワナンの宴への誘いに応じた。

特に彼にとつて必要とも思えないような、はるか昔の名詩人の命日にその詩を朗読するという無意味な名目の会ではあつたが、それでも出席すると彼はワナンの使者に返事をしたのである。

それにしてもワナンと言う姫は、見境無く宴に顔を出しているのだな、と今までラシャに捨てられた数々の招待状をみながら、コーレウスはあきれていた。

現王のすぐ下の同腹の弟で宰相にもなれる立場のヴェアミン大公の正妃の娘で、早くも美貌が噂されるワナンと、現王の第二王子のラシャである。ラシャの母の身分はロティオールの古い家柄で中堅程度の地位のリコリス子爵家の出身であるが、その程度の格式の差は瑕疵になるまい。

身分的にも、見た目にも、誰から見てもワナンとラシャはお似合

いであると言われるだろう。

もつとも、ワナンの父のヴェアミン大公がそれを喜んでいないらしいといふことも噂になつてはいた。ヴェアミンとしては、現在一九歳の王太子リディスにこそワナンを嫁がせたがつてゐるのだとう。

もともとワナンがラシャに初めて会つたのは、父ヴェアミンの意図があつて家族と共にリディスの住まうレスフォを訪れ、ついでに風光明媚をうたわれるソントに立ち寄つたときであつたのだ。

それ以来、ワナンはだれかれ構わずラシャの美貌を言い、彼に会つたときにどんな言葉を交わしたのかと語り、そしてラシャ本人に對しても手紙を何通も書き送つたのだ。

それを受け取つたラシャも木石ではないから、会つたときに魅力的で可愛らしいと感じたワナンからの度重なる手紙には悪い氣はしていなかつた節がある。しかしながら、しばらくワナンの文章を読んでいりうつに、彼には今ひとつ共感できる内容がなかつたために徐々に興味を失つていつたようである。

ヴェアミン大公の意向は、リディスと親しくなり、あわよくばワナンをロティオール王妃にすることだったから、彼女の興味がラシャに行つてしまつたことは誤算であつただろう。ワナンは父の意向どおりに、リディスにも多くの手紙は書いていたようだが、ラシャへの物よりは熱を入れていなかつた。

先月の王の戴冠式に着た服以外にもワナンは「宴に着て來い」とばかりにラシャにいくつかの服を送りつけてはいたが、それらは華美に過ぎて身に着ける気持ちをラシャに起こさせない物ばかりである。そのため、軍学校の地味な灰色の略礼装を着てワナンが誘つてきた宴に行くことにした。

たしなみとして、ビディアなどに勧められて、ラシャのほうからワナンを迎えて行つたのだが、その彼の服装を見て、ワナンが落胆したことは言つても無い。ラシャが迎えに現れてからしばらくは

ぐずぐずとそのことを言い、すぐにでも着替えて欲しいとまで言い立てた。

だが「遅刻してしまった」「う」と素つ氣無くラシャにかわされ、少し憮然として彼の腕を取つて部屋を出た。

それでも、宴の席に出れば、ワナンはみなの視線を集めてご満悦であつた。この視線があるから宴に出ることが彼女は好きなのだ。王女と同等の身分でありながら、王女より行動に制約が無い。その高い地位に対してもかの貴族たちは最上の敬意を払い、そして彼女の美貌と装いの素晴らしさを褒め称えてくれる。

そのうえこの日はラシャと共に居る。彼の服装こそ誰もが知っている学校の略礼装で、灰色の生地に灰緑の縁取りという上着に黒の下裾着という地味な色あいで、飾り気のない分、彼の美貌を際立たせているようだった。

ラシャはワナンと共に人々の挨拶を受けながら、首を伸ばしてあたりをくまなく見回している。肩こそまだ華奢だが、身長は既に常の成人男性より頭一つ分は伸びているだろう。その高さで、人々を頭上から眺めおろしている。少し不遜な態度にも見えた。

ただ、彼は探しているのだ。ナセアを。だが見当たらなかつた。途端に宴への興味を失い、一応の名目である故詩人の朗読が始まつたときにはあまりの退屈さに帰つて良いかとワナンに問うた。しかし、ワナンが次は自分が朗読するから、と言つて引き止めるので、仕方なく残つた。

ワナンの朗読については、どうとも評価の仕様が無かつた。興味が無く聞き流しながらも、ワナンより前の人の方がまだ表情を持つて語りかけてきたし声も通つていて、ましてワナンのように途中で言葉を詰まらせもしなかつたと感想を持つた。

朗読を終えてから、ほかの貴族たちに褒められながらワナンはラシャの隣の席に着いて、彼の顔をうつとりと見上げている。彼からの何らかの評価が欲しいのだろう。そういう表情で居た。無言の催

促にはラシャは答えなかつた。

素直に、下手くそな棒読みだ、などと感想を述べればワナンは怒り出すかもしだれないし、傷つきもあるだろ。嘘の誉め言葉を述べて彼女にへつらうつもりもラシャはない。彼の沈黙は、あえて傷つけることもない、という優しさであったのかもしれない。

それからラシャはますます退屈になり、仮面を隠そうともしていない。それに焦燥がある。頭の中はナセアが何処に行ってしまったのかという疑問ばかりが沸いていた。秘密に、と彼女に言われた事も振り払つて、大声で叫んでしまいそうな気分になつてゐる。

ワナンとラシャは、身分柄最も上席にいる。それゆえに人目にも立つたが、ラシャの苛立ちを隠さない表情は、明らかに他の客たちの興を殺いでいた。

若い娘の客は、不機嫌な顔でさえ美しいと見惚れて居たが、曰く付きの美貌の王子に興味の無い女性や、男性客などは、ラシャの態度を不快に感じるようになつていつた。だが、ヴェアミン大公の威光を背に負つワナンの手前、彼女が憧れてやまないラシャに苦情など述べることはできない。

この日の宴は、白々とした空気が流れたまゝに、みながみな口数が少ない今まで散会になつた。

宴の会場となつた某伯爵家の館から、馬車に同乗しながら、ワナンは

「お立ち寄りになりませんか？」

珍しい美味しい物を用意していますよ、ヒカル・アミン家の館にラシャを招こうとした。彼と離れたくないからである。

「いや、帰ることにするよ」

ラシャの返事はあくまで素つ氣無かつた。

次のワナンの宴への誘いは五日後だった。それにも行くと彼女に返事をしていた。

しかし、先の宴があまりにも退屈だったために諾としたことを後悔しても居る。

が、その場にはナセアは来るのだろうか。

もう一度、何としても彼女に会いたかったし、姿を消してしまったことを問いたい。ラシャの望みはそれだけだった。

昼間は、まつとうに軍学校へ行き、もやもやを発散するように剣や乗馬の訓練を熱心にこなした。夕方の、戦術の研究や新兵器の評論などの時には少し眠くなつたが、それでもあの詩の会の拷問並みの退屈さに比べればずっと面白い、と思つた。

今度の宴は、某公爵の婚約披露であった。

ティーランから同等の身分の姫君が来たのだといふ。

「ティーランといえば、例のの方、このところお見えにならないと思つたら、あちらで『再婚なさるそつですわよ。もつ船もお発ちになつたころかしら』

披露目が終わり、食事も終わり、人々がいくつかの島に別れて談笑をする時間帯に、そんな話を始めた夫人が居た。そこで、ラシャは他に行き場も無く、ワナンの傍らに立つてゐる。彼女に相変わらず腕を掴まれていて、振りほどくわけにも行かなかつたからだ。

の方、というのはラシャにはまったく見当がつかなかつたが、ワナンが夫人の言葉を補足したのでわかつた。

「ああ、の方ね。そのお話なら他でも聞きましたわ。あんな方、私のいとこの内に入るなんて嫌だわ、と思っておりましたの。でも端下女の血は争えませんのね。ふしだらな方だと思いましたのよ、

ナセア様なんて。ようやくこの国からも居なくなるのですってね  
「先月でしたかしら。ワナン様が面罵してくださいって、の方顔色  
が変わつたらしたの。いい氣味でしたわね」

口火を切つた夫人ではない女性がその話に加勢した。  
「お母様からも聞きましたのよ。本当に貴婦人の風上にも置けない  
方」

「ワナン様のおっしゃるとおりですわ」

「私たち淑女の敵でしたもの。ひどい方。伯爵のお嬢様など婚約  
者を取られたとか」

他の女性たちも口々に言つ。酷いと言いながら、どこか楽しげに。  
あの宴では某国の公使、この宴では某子爵、…。いつたい何人の  
殿方と…。

何の話だ、とラシャは耳に入つてくる情報を頭の中で処理できず  
に、眼が回るような心地になつていて。誰の話だ、と思つたが、ナ  
セアの話に間違いが無いらしい。

彼の知らない、宴に出ていたナセアの、ここにいる女性たちの眼  
に映つた姿らしい。

あの時はしじけなく男の腕にもたれていた、このときはほとんど  
胸が見えそうな服を着て誰それに身体を押し付けていた、というよ  
うな婦人たちのまったく下世話な報告に、まだ一四歳に過ぎない青  
臭い小娘のくせに、ワナンはいちいち「ぞつとしますわね」「許せ  
ませんわね」「ひどい方ね」「いやらしいこと」「なんてふしだら  
なのかしら」と相槌を打つていて。

聞いているうちに、ラシャは居たまくなってきた。

「よせ」

と、つい口から厳しい声が出てしまつた。ワナンがびく、と硬直し  
ている。

「居ない人のことをあまり悪し様に言つのは、聞き苦しいよ」

言いながらようやくワナンの手を振り解いた。

そのラシャの袖を再び掴みながら、

「ホントのことを言つてるだけです、悪口だなんて…」

眉を寄せながらワナンが唇だけ微笑ませている。

「でもラシャがお嫌なら、このお話はここまでにしますわ」

甘えたような上目遣いでラシャを見上げながら、鼻声でワナンが言った。

華やかな睫毛が上を向いていて、唇が赤かった。少女なのに慣れた媚態がある。そういう表情が特に蟲惑に満ちて美しく見えると誰かに教わったかのようだった。

「俺は帰る」

ラシャは逆にそのワナンの女くさい表情に悪寒を覚えて、掴まれた袖を振り払つて、人々を掻き分けて外へ出て行つた。

ひどく眩眩がするようだつた。

外に出たのはよいが、来た時はヴェアミン家の馬車であつたため、ワナンと行動を異にしてしまつと、馬車がない。

物慣れた貴族ならば、同様に帰る誰かの馬車に同乗するように、従者に手配をさせるのだろうが、ラシャにはそのような機転も無く、また彼自身の従者というものも連れてきていなかつた。

ぼんやりしながら、歩いて庭園を抜け、門を通つた。門番もたつた一人で徒步で通る客人など滅多に見た事が無いらしく、瞠目しながら会釈をして見送つていた。

十分に夜であつたので、あたりは真つ暗である。方向もわからない。

昼間であれば、宮殿なり遠望できたはずで、ラシャのソント館にも行く道がわかつたかもしぬないが、伸ばした手の先も見えない闇では、どうにも何処へ向かつていいかも判然としない。大人であれば、門番に灯火を借りたかもしぬないが、ラシャはただ呆然と方向もわからないまま脚を進めている分別の無い少年である。

周りの状況もわからず、見ようともしないままに、ただ脚が向かう方へあてどもなくラシャは歩をすすめているのである。

考えてみれば、ラシャはナセアの何もかも知らない。ナセアに何かを訊いても、また後で、また明日、そうとしか答えてくれなかつた。最後に会つた夜でさえそうだつた。ならばまた明日、ラシャはそう思つて、ただナセアを求めた。

一年前にグローセン男爵の夫人として挨拶を交わし、先月は急に部屋に引き込まれて愛し合い、その行為を幾度か重ねた。ただそれだけの間柄でしかなかつた。

あの場に居た女性たちが口々に言つていたふしだらな噂を、ナセアに会つて、彼女に否定して欲しいとラシャは思つた。

しかしナセアは、どうやらもうロティオールにすら居ないのかもしないといつ。

何の別れも告げられず、何の前触れも無いままに、ただ前の日のおりに愛し合つて未明に別れたその次の夜には、彼女の部屋は空になつていた。

先ほどの話では、彼女はティーランなどと云う他国に嫁ぐのだと言つではないか。

彼はナセアに何度も、愛していると言つたのに、結婚したいと訴えたのに。

これから的一生のうち、もう会えないかもしれないといつのこと、ナセアはラシャに何の言葉も告げなかつた。

「どうしてだ…？」

ラシャの歩調が、次第に荒々しくなつてゐる。呼吸も乱れていた。あまりにも静まり返つた貴族の屋敷街。

叫びだしてしまつたがつたが、静寂の重さに抗う氣力もなく、ただ乱暴な足取りで、ラシャは歩いていた。

ただ頭の中にはナセアを責める言葉ばかりが浮かんでいた。戯れ。

裏切り。何も知らぬ愚かな子供をからかう気持ちだったのか。彼女が目の前に居たら、その言葉をラシャは投げつけているだろう。自らの心の痛みを、ナセアに押し付けるが如く。

ナセアの危惧は正しかった。

いざれ彼女の行状に関する噂を聞くことがあれば、ラシャは、嘘だと言ってくれ、と訴え、そうしてナセアを困らせ、清らかに傷つけるだろうという推察は、まさに正鵠を得ていたと言つて良い。

ナセアの噂を少し耳にしただけで動搖し、嘘だといって欲しいと胸の中で訴えているラシャには、きっと彼女の何かを受け入れることなどできはしない。

そして今のラシャには、その自覚すらない。

だからナセアはラシャの問いに何も答えなかつた。

だから、何も告げずにナセアは去つてしまつた。

だから、…。

幸いにも、ラシャが足を向けていた方角は誤つていなかつたようで、空が白み始めたころ、ソント屋敷を見つけて入り、怪訝な使用者たちにも何も言わずに寝室に飛び込んで服を脱ぎ捨てて眠つた。次に目覚めたのは、既に太陽は中天に昇つているような時間であつた。

使用人に、宮殿内に居るままの腹心のディアとコーレウスを呼び出すように命じ、軍学校へ向かつた。

ラシャが宮殿に来たのは、先月の王の即位記念式典に出るためで、普段の拠点は領地のソントである。ソントの近くのレスフオは口ティオールにとって重要な軍港であり商業港でもあり、いうなれば副都のようなものだ。ここにも軍学校があり、ラシャは通常レスフオの学校が本拠なのである。

王子であるから、年に数ヶ月は首都キーウ・ティアラに滞在することもあるうとことで、届けさえすればどちらの学校に通つて

も構わないことになっていた。ラシャは律儀にそれを守つて学校に行っているが、軍学校に在籍している他の王族や貴族の若者の多数は、拠点の校にすら滅多に顔を出さないものも居る。

この日、彼が学校に向かつたのは、自領のソントに帰る日を届け出るためであった。

ソントへ戻る道中。

普段よりずっと無口に馬に揺られるラシャを、近侍のディアと小姓のコーレウスが、ときおり懸念を帶びた眼差しで見た。そんな視線もわざわざしく、ますます彼は無愛想になる。

途中の休憩の間に、ふと何かを思い出しては物を投げつけたり、立ち木を蹴つたり、拾い上げた枝を折つたりしている。ひどく怒っていると思えば、中空を見つめて、涙さえ浮かべているのではないかという表情をすることもある。

滞在地の宿所では、庭に出て足がもつれるまでディアを相手に剣を交えるのだ。

3泊目の宿で、ラシャの稽古に付き合つてどんづらにくたびれたディアに、コーレウスが話しかけた。

「ディア、大丈夫か？」

「んー、何とも言いにくいやなあ

ディアは肘にシップを巻きながら、唇の端で笑つていた。

「よく付き合つよ。ラシャおかしいだろ、今。何があつたんだか知らないけどさ。話してくれればいいのに」

「話せないこともあるんだぜ、ボウズ。じいて聞くんじゃないぞ」

「じゃあディアはなんだかわかるのか？」

「お前も二・三回痛い目を見りやわかる」

「俺は痛い目なんか見ないよ。兵士にはなんないからね」

「ばか。と言しながら、ディアはコーレウスの額を指ではじいた。

「痛いじゃないか、何すんだよ？ おーいて。これぜつたい腫れる」

「じついう痛い目じやねえってんだよ」

抗議するコーレウスに、ディアは高笑いしながらもう一発をお見舞

いした。

「わかつてゐよ。わかつてんのにもか、一回もやぬ」とないだろ！  
いつてえなあ、もう！明日はもう面倒見てやんないよ？今夜出かけ

てもカギ開けてやんないよ？」

「それあ困る。頼むぜ。」花窓の姉さんたちが俺を待ってるんだよ」「シップ巻ってるヤツが、言つ? それでも行く? 」

「……………」

「やらしー。やだやだ」  
黒鹿たなあ カキは こゝにいる  
大事にしてもらへんたよ

キーウから南海道を真っ直ぐ南下し、レスフォを経由して海沿いの道を西に向かつて約半日でソントである。

レスフオに着いたラシャは、まず領主の館に向かう。そこには兄の王太子リーディスがいる。また、ラシャ・

館の一室をレスフォの軍学校に通うための滞在用に借りている。ひとまずそこに入ることになつてゐる。

十日間学校に行き、十日間ソントに戻る。ハシヤはもうこいつ日常の暮らしに帰つて行つた。

キーから出て、レスフオに十日間滞在してそれからりょうやく皿へやひより領のソントへの向かひ。

領のソントへの向かう。

ラシヤが父親である王から与えられた領地のソントは、レスフォ  
のように良港があるわけでもなく、商業が栄えているわけでもない。  
豊かとは言い難い土地であるが、その代わりソントにはおつとりと  
した美しい風景があった。果樹園と牧場と畠と、こんもりした森と、  
小さな漁港と、そして何よりもまばゆく青い海がある。  
見慣れたはずのソントの景色が、今のラシヤの眼にはひどく優し  
い風景に映つた。波を育む風景である。

い風景に映つた。彼を育んだ風景である。

ラシヤの後ろにしたがつていたユーレウスが、深呼吸と共に言う。のどかな声を振り返ると、ユーレウスの傍らでディアも緩やかに頬

をほいほばさせていた。

彼らは、何も訊かなかつたな、とラシャはふと思つ。

平らな気持ちで省みると、戴冠式に出てからおよそひと月あまりの間の、ラシャの拳動は明らかに不審だつただひつ。思い起こせば羞恥に顔が火照るほどだ。

それに当初の予定では、戴冠記念式が終わればすぐにソントに戻る予定だつた。

それを、ラシャはなんと言つ理由も彼らに言わず、滞在を伸ばしていた。

そのことを何故かと、ティアもコーレウスもあえてラシャに問うことはしなかつた。

今もなお。

彼らの穏やかな沈黙を、ラシャはありがたく感じた。彼の心を察し、むやみに触れることなく見守つてくれている。そういう優しさを示してくれているのだと悟ると、ひび割れた心の隙間に、温かな水が浸透したような心地になつた。

いづれ二人から問われる日が来るかもしれない。今は、多分、何も答えられないだろう。問うべきは今ではないと、それも彼らはわかつているかのようだ。

踏み込むべき時を、過たずに知つていい。それは思いやりなのがもしれない。

ナセアとはどうだつたのだろう。

かつてないほど密接に膚を触れ合つた間柄でありながら、ラシャは彼女が何を思つていたのかもわからず、問うてはぐらかされればそれで終わりにしてしまつてしまつた。強いてわかるうとはしなかつた。今でも、ワナン達が噂していいたようなひどい行状の女性がその正体とは、ラシャには信じたくない。違う、とナセアの口から聞きたかった。理由があるならそれを知りたい。だが、今はもうそれも叶

はない。

もつと、踏み込んで問うべきだったのだろうか。

（俺は馬鹿だ）優しく開けたソントの風景から、ラシャは目を落として俯いた。

ラシャはただ自分が為したい事を為し、伝えたいことを訴え、ひたすらに求めていただけだった。ナセアのことを何も知りうともせず、自分の思いだけを自分の中に必死にあふれさせていた。そんなラシャにナセアが何も告げなかつたのは当然なのかもしれない。

富廷の人々が口にしていたナセアの「ふしだら」であるという噂を耳にした時の動搖も忘れ難い。思い出せば今でも腹の底が煮えるような心地になる。

もし、とも思う。この数日、少し考えた。

あの時に本当にナセアが居たのなら、彼女の話を聞く耳が自分にあつただろうか。ラシャは、地面を見ながら考える。

きっと、ナセアを責めただろう。責めて、罵つて、彼女を傷つけたに違いない。

きっと、それさえもナセアは見抜いていたのではないか。だから、黙つて姿を消した。

そんな気がしていた。

あの人は複雑な人だつたのだ。この数日、よつやくそう思えるようになつた。

はるかに大人で、女性で、多面かつ多層に出来ていて、ラシャはそのほんの一面にからうじて指先を触れただけであつたのだろう。もしかしたらラシャの指先はナセアの表面を滑つただけで、その実、彼女に触れてさえ居なかつたのかもしれない。

ナセアにとつて彼が一時の戯れの相手だつたのか、少しは愛してくれていたのか、答えを持つているはずの彼女が黙つて姿を消してしまつた今となつては、そんなこともラシャには一向にわからない。

濃密に刻まれたナセアとの記憶の中で、一つ一つの行動に対して後悔が押し寄せた。

あの時はどうして「うしなかったのか、どうしてああ言わなかつたのか、どうして問いかけなかつたのか、そんなことを一瞬のうちに脳に昇らせている。

もつと強いて問いかければ、もしかしたらナセアの真実に少しは近づけたかも知れない。すさんだ行動に陥つた事情も、あるいは聞く事が出来たかも知れない。問う勇気が無かつた。ナセアに嫌われたくない恐れていたのだと、今ならわかる。

後悔は、胸にも脳裏にも、あふれるほど波のように寄せては返す。だが後悔は後悔だ。それ以上の何をなせるものでもない。今なら、きっとナセアを責めることなく話を聞く事が出来るかも知れない。

今なら。そう思つても、もう遅いのだ。

わずかに触れあつた時間の中で、ナセアは、自らを語る相手ではないとラシヤへの評価を下した。それだけのことだった。

ナセアは帰つてこない。

ラシヤも、どれほどあがいたといひで彼女と触れ合つていた時間にさかのぼることなど出来ない。

そのときのときで、言つべきことを言い、問うべきことを問いつべきことを為さなければ、目の前に居る大切な誰かに大切なことを何一つ伝えられないまま、大切な誰かからの気持ちも伝えてもらえぬまま、一瞬は終わつてしまつ。

そしてその一瞬は、未來永劫帰つてこない。

時は帰らない。それはとても明解なことなのに、ラシヤはそれをおろそかに思つていた。

（俺は本当に馬鹿だ…）

見慣れたソントの優しい風景が、眸の中で少しひびつた。途方に暮れたラシヤの背に、「ああ、もう行ひ」 と声がした。

遠い海が、ナセアの瞳の色に似て見えた。

おわり

「美貌の王子と年上の女」を、最後までお読み下さりありがとうございました。

母体サイトの「春想亭」では、昔の日本を舞台にしたR-18の時代小説ばかりを創つております春生が、なぜいきなりこのような架空歐風中世物など、専門外の分野に手を出してしまったのでしょうか。設定など稚拙でお恥かしい限りです。

時代物であれば、このあたりどうだけ?なんて事はちょっとばかり文献やwebの情報を検索すれば、なるほど、という解答がちやんと日本語で現れます。でも架空の世界であれば、これは自らの頭で創出しなければならないんですね。たいへんですね、これ。でも好きだつたんです。

綺麗なドレスとか、マントとか、青い目とか、石造りのお城とか、そういう世界だつて、大好きなんです。お姫様と王子様とか本当に今でも大好きなんです。シンデレラとか親指姫とか白雪姫とか、ホント好きです。

とはいって、やっぱり、お侍と着物もこよなく愛していますが…。

サイトにて連載中に、ブログでちらりと書いたかと思いますが、この作品は、中二くらいの頃から書いては止め、やめては書いている長いファンタジー物のサイドストーリーに当たります。

そのファンタジー物とは、地名とラシャ以外はほぼ無関係なお話ですので、単体で披露することと致しました。

「愛している」とこたえて、言わせたくて、このお話を出しましたような気がします。

素敵な、大好きな言葉です。でも普段、公開しております和物の時代小説ではなかなか使えない言葉なのですよ。

さてさて、そろそろ作品についてお話しします。

隣国と戦争中の、ロティオールという国の宮廷が舞台になります。その戦争によって夫を失った若い未亡人のナセアと、滅多に宮殿に現れなかつた田ぐつきの美貌の王子ラシャとの、ちょっととしたふれあいのお話。そんな感じでしたでしょうか。

恋だつたのかどうか。愛だつたのかどうか。それさえも定かではないようでした。

ラシャにとつては、そのときはきっと「初恋」という意識はあつたのかもしません。そんな気はしますが…。

ナセアは、つまり戦災未亡人です。

国の物事によって、命を犠牲にした個人の、その妻という位置ですね。いつの世も、命を失う人、その家族というのは、考えただけでも辛いものだと思います。国つて何だ、国境つて何だ、戦争を起こす國家つて何だ? と思います。本当に。

密かに、私は彼女の夫のジェイをとても好きでした。普通の良い人として創ったキャラです。

ジェイは誠実にナセアに向き合つて、彼女のことっこよなく愛していましたと思います。ナセアも、そんなジェイを、数年の夫婦生活の中でほのぼのと愛していましたことと思います。

戦争さえなければ、きっとお互いにちょっとした愚痴を言いあいながら、幸せで平凡な生涯をまつとうできた夫婦ではなかつたかと考えています。

ジェイは過ちを犯しました。その後の彼の態度は、ナセアには誠実だったのかもしれないけれども、過ちの相手には残酷だったといえます。生真面目すぎたからとお話には出しておりますが、真面目

すぎる人つていうのも困りものですね。誠実という意識も不思議な物で、一方に対して誠実であることがもう一方に対して不誠実になるという…。正義が必ずしも全てに対して正しいとは限らないのと似ていますよね。

ジョイが命を失うことがなければ、その後もナセアに過ちを隠し続けて年月を過ごしたかもしれません。それで良いかどうかは、夫婦の間で判断することであつて私はなんとも言えません。

ナセアにとつては、静かに深く愛し始めた夫のジョイの死と、その死によつて一つの言い訳も聞けない状況で彼の裏切りを目の当たりにしてしまつたことは、きっとものすごくショックだつたと思ひます。多分、ジョイの子供をナセアは生みたかったのだろうと思ひます。彼と過ごした結婚生活の中でそんな話も何度もしたのではないでしょうか。そうして望んでいたはずのジョイの子をナセアは授かることなく、他の女が彼の子供を産んでいたという事実が、目の前につき付けられたという状況ですね。それを知つたときにはもう故人であるという…。辛いですよね。もし私がその状況になつたとしたら、耐える自信はありません。

だからそのことを考えなくて済むように、一人にならなくていいように、さまざまな男性を渡り歩くようになつてしまつた。そんな設定になつております。あるいは、自身を汚すことと、自分を愛して裏切つたジョイへの報復のような気持ちもどこかにあつたのかもしれません。その行動についての是非はともかく、同情には値するかなと、そんな気持ちです。

ラシャと出会つたときのナセアは、まだジョイの死による気持ちの混乱の中に居たのではないかと思つています。

二人の出逢いとは、ナセアが、ジョイを死に追いやつた無能な上司であるヴェアミンへの恨みで、その復讐として、彼の愛娘の想い人のラシャを奪い取ろうと考えた、そんな状況でした。

そんな状況について、ナセアも、作者も、ラシャに対して一つも

説明していません。

大人の女性に誘惑されて、初めてそんな行為をして、好きになつて、そして黙つて去られてしまつたうえに、その後、彼女の不行状を他人から知らされるという、恋愛のみならず人間関係に疎い少年にはちょっと酷な経験だつたかもしれません。気の毒でした。

傷ついただらうなあ、なんて思つています。ははは…。いや、笑うとこじやないです。ごめんなさい。

まあ、ナセアが置かれた状況について説明したとしても、それが少年に理解できるのかどうか、それもまた疑問ではあります。

そのあたりを理解できる15歳がいたら、それはそれで尊敬に値するかと思いますが、ちょっと物足りないくらいの所が少年を描く楽しみでもあります。複雑な気持ちなど理解しないで居てくれたほうが、作者としては有り難いかな、なんて思つています。

ナセアは、ジェイの遺した事柄を整理して、ラシャに黙つて、海の向こうの国に出て行つてしましました。幸せになる、と言つていたけれども、実際にどうなるかはわかりません。ただ、幸せとは誰の定義で決めるものなのかと考へると、それは自分自身の心だけが感じ取ることであるわけで、幸せになる、と能動的に考へている限り、多分、ナセアは幸せになるんじゃないかな、なんて、少しの願望を込めて思つています。

ラシャの今後については、何とも…。

その後、誰かをまた好きになるとしても、ナセアの存在を胸のなかから捨て去ることはできないのではないでしょうかね。そういう忘れられない存在が居ることが、今後のラシャにとつてもまた彼を好きなる人にとっても幸か不幸かは、やっぱり彼等自身が判断することで、何とも言えませんね。

この作品も、実はけつこう以前に書いたものであつたと思います。前のPCで作り始めたものかと思いますので、もう6年前くらいに

はなるかもしません。サイトでの公開にあたり、少々の加筆修正を加えましたが、ほとんど原型のままに出しています。稚拙なところもあつてお恥ずかしいのですが、面白くお読みいただけておいたら、幸いに存じます。

何かしらお感じになつたこと、ご意見や誤字脱字の指摘などございましたら、どうぞ春生まで教えてください。まことにまことにまでもお待ちしております。

また他の作品でもお目にかかるることを祈りつつ、とつとめのないあとがきはこの辺りで失礼いたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9481o/>

美貌の王子と年上の女

2011年8月21日03時30分発行